ラブカクテルス　その９０

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブカクテルス　その９０

【Ｎコード】
Ｎ５３１３Ｆ

【作者名】
風　雷人

【あらすじ】
今宵は世にも不気味なカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は澱みでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私の視線に入ってきた。
澱んだ水が目の前を流れる。
もうどれくらいこの川底にいるのだろうか。
私はそんな川の中から空を仰ぐ。
いい月が出ているようだった。
私は穏やかな流れに漂い、なぜ今更こんな川の底で目が醒めたのかを考えた。
私はどうやら長く伸びていた髪がくちかけた木の枝に絡みつき、この同じ場所を離れることができないでいるようだった。
私はドザエモン。生きていた頃は自分で言うのもナンだが、意外と綺麗な女性だったのだが、今もし誰かが私を見つけたなら、きっとそう呼ぶだろう。
私はもう人間ではきっとないのだろうから。

しかし、心はやはり生前のままの女という性別なのだから、その呼び方はできれば止めてもらいたい。せめてドザ江だのドザ子などならまだ我慢、いや、やはりできないか。
そんなくだらないことを考えて、ただただ漂いどうにもならない時間を潰していた私は、少し気が付いた事があった。
私は考える事ができて、しかも目はなんとなくだがものが見えている。ということは、
私は試しに体に力を入れてみた。
すると、まず動いたのは右手だった。
動く。
私は驚き、その弾みで上半身を起こしてしまった。私の髪の毛からは無数の水滴が溢れ落ち、体中に大量の水が流れ走るのを感じた。
なんだ生きていたのか？私は思ったが、それは違っていたようだった。なぜなら私ときたら、あんなに長く水の中にいたのにも関わらず、全然息苦しくなかったし、しかもこの状況で寒くない。そして何より、広げて見た手には血色はおろか、皮膚のあちこちが腐り、酷いところになると骨までが見えている始末だった。
自分でも具合が悪く、いや、きっと死んでいるのだろうから具合が悪くはならないか。
とりあえず、私は立ち上げることにした。絡みついた髪を何とかほどいて。すると、川岸に人の気配を感じて振り返るとそこには、全身を黒い影に身を包み、深々と帽子を被った、きっと男性であろう人物がこちらを見ているかのように立っていたのだった。
私は恥ずかしさと驚きに焦り、勢いよく、再び水中に身を沈めた。
しかしその姿は完全に見られていたらしく、緊張気味に水中から様子を見ていた私の水上を、その人のものであろう手が、私に差し延べてくるかのようにかざされてきたのだった。
私はしばらくそれにどう答えていいか迷っていたが、よくよく見たその手の様子がまさに私同様にボロボロであることが水中からでも見てとれたため、思わず、というより本能に委されたような感覚で

私の手は水からゆっくり上がっていった。

握られた手を引かれて起き上がった先にはやはり、さっき見かけた男性がいた。
彼は私に向かって、ゾンビになった気分はどうかと聞いてきた。
私は、あっ、そっか、ドザエモンではなくてゾンビかと、何かホッとしていると、そんな私を彼は、まんざらでも無さそうだねと微笑んで返すので、私もゾンビながら微笑んだ。

ヤケに真ん丸でいて、しかも蒼白い月の下、私は久しぶりの水中以外の世界にいることに感激し、彼はその様子を暫し見ていたかと思うと、適当なタイミングを計ったように、私に、さぁ行こうと言い出した。
私はその言葉に慌てて、どこに行くのか？いや、なぜ今のようなまか不思議な事になっているのか？そもそもあなたが誰なのかを一気に聞きまくると、そのゾンビの男性は、歩きながら話すとしようと、また私の手を取り、歩き出した。

月灯りが照らす道を二人はゆっくり歩いた。
しかしながら、考えてみると、ゾンビになったと思ったら、まるでナンパされたようなこの出会いは何なんだろう？運命のいたずらだろうか？
そんな事を考えている私に彼は切り出した。
君は美しい。だから選ばれたんだよ。
私はまた、言っている意味の理解に苦しみ、首を傾げる。すると彼はスキップを踏みながら続けた。
今夜はゾンビのフェスティバルがある。そこで舞踏会も開かれていて、そして、少しゾンビの彼は興奮気味に、
伝説のゾンビスターが現れるらしいんだっ！と身を微かに震わせて言った。そしてその興奮した口調のまま、

彼の踊りと言ったら、一回それを目にしたなら、地獄の底に堕ちたって忘れられないくらいの凄さでと、私の手を取り直して、まるでワルツでも踊るかのようにくるくると回り始めたのだった。
しかし私はそれが何の説明になっているのかを頭の中で整理してはみたが、やはりそのスターというものがいかに凄いのだろうということと、そして嫌でもそこに連れて行かれるのだろうことだけが理解できたみたいだった。
まぁ、私の今の立場はゾンビなのだから、これ以上怖い事もないだろう。
私はその想いで開き直り、浮足立つ彼と一緒にスキップを踏んだ。

会場には、それらしくコウモリが飛び交い、入口の垂れ幕には、かなりの下手な字で、ゾンビ・ハッピーフェスティバルとデカデカ書かれてあり、その奥に色とりどりのテントと出店の数々が並び、かなりの本格的なものなのだと、私は驚かされ、と同時になんだか久しぶりに心がウキウキしてきていた。
彼は舞踏会にはまだ時間があるから、あちこちのテントを見て回ろうと提案してきて、私は笑顔で頷いた。
テントは色々な出し物で盛り上がっていた。
あるテントではサーカスが、もちろんゾンビの動物や、ピエロゾンビ、ゾンビ遊戯団の人並み外れた見事な曲芸で沸き立ち、その中でも炎の輪っかに飛び込んだライオンのゾンビが、本当に燃え出して、それでも凛々しく吠えている姿には圧倒され、また別のテントでの手品ショーでは、ゾンビの綺麗なアシスタントの女性を使い行われていたショーの、箱に入ったその女性がのこぎりで切られる時などは、かなりハラハラするものだったが、切られた女性は切られたままの笑顔で箱から出てきて、そのまま接着剤で繋がれていたのには目が本当に飛び出す客が
続出し、それを拾い集めるお客で大騒ぎだった。
凄い。私はそんな様子に驚かされるばかりだった。

そんな姿の私を彼は、舞踏会はこんなものでは済まないよと、一層私のワクワク感に拍車を掛けさせた。

時間だ。彼が私の手を引いて少し足早になった。向かっているのは木でできた大きな扉。それがボーンボーンという合図と共に、ギギギーィと鈍い軋む音で開かれた。

客達は皆、私達と同じ期待に溢れた顔で中へと入っていき、そしてナゼか全員が所定の位置が決められているかのように並び出すと、揃ったところで音楽が鳴り出した。

飛び抜けたその軽快なリズム。心の底に手を入れられて、隠れていた本能を引きずり出されたようなこのビート。

私達は肩を小刻みに上げながら独特な踊りを始めた。

練習をしていた訳でもないのに、私達の息はぴったりだった。

そこに歓声があがる。その先にいたのは噂のスターであることに間違いなさそうだった。

彼の出で立ちは、真っ赤なレザージャケットに、黒のジーンズ。目は黄色く輝いていた。

そして歌い出した。

そのスターである証の凄いステップと共に。

私達は攣られるようにそのステップに続き、心も体もそのスターに捧げたも同然の如く、不思議な感覚と共に汗を流した。

月を歩いているような奇抜なステップ。

カマキリのような姿で行ったり来たりする不気味なダンス。

私は彼が、興奮して話していたその気持が、体全身でそれを体感したことで理解した。

確かにこの舞踏会に参加できるなら、死んでなんかいる場合ではなかった。

私はその一時を心の髄の髄まで堪能し、そして歌と踊りは終演を迎えたのだった。

私は感激して走り寄る彼と抱き合い、その歓喜の叫びを踊りと歌に

捧げた。
するとスターが私に近づいてきて、握手を求めてきた。
私はドキドキしながらその手を握ると、スターは、
ようこそ。素晴らしい見事な踊りでした。さすがは僕が見込んでこっちの世界に誘い、魔法で呼び醒ました甲斐がありました。と言うと、またいらしてくださいねと言い残し、静かに去って行った。
私はナゼかその声を聞いて、思い当たる事があった気がしたが、そんな私の気も知らない彼が後ろで、まずい、といきなり言い出したので、それらはふうっと消えて思い出せなくなった。
彼は私の手を再び引いて、
日が昇る。その前に戻らないと！と、焦り出して駆け出し、もし日の光に照らさ
れたなら、僕らはもう溶けてなくなってしまうよ。
そう言いながら、フェスティバルを焦って後にしていったのだったが、私は後ろ髪を引かれる想いをそこに置いてきてしまったような気がしてならなかった。

あの川岸に近づくと、彼は私に、また水の中に戻るように言って、どこかへ早々と消えて行ってしまった。
私はナゼまたあの水の中なんかに戻らないといけないのかと思ったが、しかし言われた通りにするしか無さそうだった。
なぜなら日の光はもう星達をも追い払い始めている。きっと本当であろう彼の話を信じて私は川に再び身を沈めて大きく息を洩らした。
意識はだんだんと遠くなり、目もうっすらとしか見えなくなってきて、私はまるで眠りに落ちるように、気分が穏やかになるのを感じた。しかし、その瞬間に一瞬、生前の記憶が甦った。
それには、さっきのスターがナイフで私を刺している光景が、古いフィルムを見るかのように浮かび上がり、私は、はっと思ったが、もうその先には何も感じることが許されないように、心の中に澱みを残したまま意識はなくなった。

その周りにはまた、心と同じ澱んだ水が、私に絡み始めたに違いなかった。
おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5313f/

ラブカクテルス　その９０

2011年1月27日15時09分発行